
日本語を教えるための教授法入門

目次

はじめに	i
本書の使い方	iv
第1章	
日本語教育とは、日本語教師とは何かを考えよう	1
COLUMN 1 日本の日本語教育はガラパゴス？	13
第2章	
日本語の知識と実践への生かし方を考えよう	15
COLUMN 2 正しい日本語とつながる日本語	32
第3章	
教授法の変遷と日本語教育の教材を知ろう	33
COLUMN 3 いろいろな教え方を学び、先輩の先生と対話しよう	51
第4章	
初級の教え方を考えよう 「導入」から「基本練習」へ	53
COLUMN 4 「手で書く」練習は不要か	71
第5章	
初級の教え方を考えよう 「状況練習」から「統合的な練習」へ	73
COLUMN 5 ビジターセッション	90

第6章	
初級から中級の教え方を考えよう	91
COLUMN 6 CEFRの複言語・複文化主義と日本語教育	105
第7章	
中級から上級、レベル別の教え方を考えよう	107
COLUMN 7 スピーチと日本語教育	120
第8章	
技能別の教え方を考えよう	121
COLUMN 8 日本語の読解方法	136
第9章	
テストの目的と作り方を考えよう	137
COLUMN 9 テストと評価基準	152
第10章	
評価の全体像を考えよう	153
おわりに	165
参考文献	167
索引	170
著者紹介	174

第 1 章

日本語教育とは、 日本語教師とは 何かを考えよう

この章を理解するための



キーワード

- ▶ 日本語教育、日本語学習者、日本語教師
- ▶ 母語、第二言語、継承語、外国語、国語
- ▶ ニーズ分析、コースデザイン
- ▶ ファシリテーター

日本語教育というのは「日本語を教える」ことですが、「だれが」「だれに」「どこで」「何を」「何のために」「どのように」ということを深く考えていくと、かなり広い概念であることがわかります。この章では、日本語教育をさまざまな視点から考えて、その全体像を探ることを目指します。

..... 1

1

日本語教育とは

1-1 日本語教育は何を教えるのか

この本を手にとられる方は、母語話者として日本語を習得している場合もあれば、日本語学習者として日本語を学習したことのある場合もあると思います。そしてこれから日本語を教えようと思っている方や、すでに日本語教師として日本語を教えた経験のある方もいることでしょう。

第 2 章

日本語の知識と 実践への生かし方を 考えよう

この章を理解するための



キーワード

- ▶ 中間言語、日本語教育文法、国語文法
- ▶ 自己モニター
- ▶ ミニマルペア、音読、リピーティング、シャドーイング、VT 法
- ▶ リキャスト

外国語学習における言語の知識は、文法や語彙など、教科書や辞書に説明が与えられているもののことです。非母語話者の読者にはイメージしやすいものかと思いますが、日本語が母語の方は、文字を除いて無意識に身につけているため、イメージが難しいかもしれません。また、日本語教師になるために、日本語の知識として文法や語彙、音声学などを習ったことがある人も多いでしょう。しかし、これらを知っているだけでは、教育実践で効果的に指導することは難しいと思います。この章では、文法と音声の知識を実際にどう指導に生かすのかという実装方法について説明します。

..... 1

言語習得の流れ

普通、私たちは母語を覚えるとき、耳から入ったことばにどのような意味や

第 3 章

教授法の変遷と 日本語教育の教材を 知ろう

この章を理解するための



キーワード

- ▶ 自然習得、文法訳読法、アーミー・メソッド、オーディオ・リンガル・メソッド
- ▶ コミュニカティブ・アプローチ、学習者中心主義
- ▶ 「ポスト教授法」の時代、シラバス、総合型教科書、文型積み上げ式
- ▶ 傾聴する、ティーチャー・トーク、語彙のコントロール

この章では、外国語教授法の歴史について学びます。そして、現在の教授法を考える際に重要な要素となるシラバスや「日本語教科書」と教授法の関係について考えます。

..... 1

1

外国語教授法の歴史と「ポスト教授法」の時代

1-1 長く続いた自然習得と文法訳読法の時代

旧約聖書の「バベルの塔」の挿話は、人類の言語が今のように多数に分かれた理由を説明しています。おそらく、人々は、遠い昔から人類の話す言語が1つではないことに不便を感じていたのでしょう。

ところが、第二言語の「学習法」や「教授法」という概念が生まれたのは、

第 4 章

初級の教え方を考えよう

「導入」から「基本練習」へ

この章を理解するための



キーワード

- ▶ 目標言語、媒介語、直接法
- ▶ ウォーミングアップ、導入、基本練習
- ▶ パターンプラクティス、反復練習、代入練習、変換練習、展開練習、応答練習

日本語の初級レベルの指導は長年、文型シラバスの教科書を使った文型積み上げ式が中心に行われてきました。その指導の主な目的は言語知識を獲得させることですが、コミュニケーション・アプローチが盛んになるとともに、教師はコミュニケーション力を育てるための活動を合わせて行い、総合的な言語運用力の養成を目指してきました。この章ではそのような流れの中で学習者に文型の知識を教えるだけでなく、コミュニケーション力を伸ばすための初級レベルの指導の方法を紹介していきます。

最近「日本語教育の参照枠」が作成されたことにより、行動中心アプローチが浸透しつつあります。このアプローチの指導の方法は学習者のニーズ分析をもとにした Can-do シラバスでカリキュラムデザインをし、その Can-do 達成のために語彙や文型を拾い、会話の指導をしていくという従来とは逆の発想のデザインです。このような Can-do シラバスの日本語教科書も出版されており、日本語教育における指導の方法も以前より幅の広がりを見せています。

第 5 章

初級の教え方を考えよう 「状況練習」から「統合的な練習」へ

この章を理解するための



キーワード

- ▶ 状況練習、統合的な練習
- ▶ インフォメーションギャップ、タスク活動、ロールプレイ
- ▶ コミュニケーションゲーム、ビジターセッション
- ▶ 教案

この章では前章で述べた「導入」「基本練習」に続き、「状況練習」「統合的な練習」について具体的に例を挙げながら示します。

..... 1

状況練習

基本練習の段階は教師主導で自由度も低く、学習者はパターンどおりに文を作る練習が中心の段階です。少しでも真のコミュニケーションに近づけるための練習が、次の**状況練習**です。ここでの状況練習とは、状況を表す短い会話の中で学習項目になっている文型や表現を使う練習を指します。基本練習ではできなかった会話の始め方や終わり方、相づちの使用などを意識させ、1つの状況の中でまとまりのある会話を練習させます。

次の状況練習の例は週末の行動を説明し、その感想を述べる会話です。ここで学習項目になる文型は形容詞の過去形なので、基本練習で過去形への変換練習は済んでいなければなりません。ここでのポイントは学習者が感想を求めら

第 6 章

初級から中級の 教え方を考えよう

この章を理解するための



キーワード

- ▶ 日本語能力試験
 - ▶ CEFR、JF スタンドダード、基礎段階の言語使用者、自立した言語使用者、熟達した言語使用者、ヨーロッパ言語ポートフォリオ (ELP)
 - ▶ TBLT、CLIL、対話的活動、反転授業
-

教科書や補助教材、教え方マニュアルが豊富にある初級から、次に中級の学習者に日本語を教える場合、何がどう変わるのでしょうか。そして、どのように教えればいいのでしょうか。この章では、初級～上級のレベル別の学習者の違いと、中級の学習者への教育方法について学びます。

..... 1

中級の目的、内容、具体事例

1-1 初級・中級・上級を分ける基準

私たちはよく言語習得のレベルを初級・中級・上級というように表現しますが、これは何を基準にしているのでしょうか。

みなさんの中には、日本語を母語としない方で日本語能力試験 (Japanese Language Proficiency Test; JLPT)¹ を受けた経験のある方も多いことと思いま

¹ 日本語能力試験は、日本国際教育支援協会と国際交流基金が主催している日本語能力の検定試験。日本をはじめ、世界の多くの国や地域で受験ができます。言語知識、読解、聴解

第 7 章

中級から上級、 レベル別の教え方を 考えよう

この章を理解するための



キーワード

- ▶ レアリア・生教材
 - ▶ スキーマの活性化、トップダウン処理、ボトムアップ処理
 - ▶ 訂正フィードバック、フォーカス・オン・フォーム、リキャスト
 - ▶ プロジェクトワーク、グループワーク、プレゼンテーション、21 世紀型スキル
-

この章では、主に上級レベルの教え方について説明します。上級レベルの日本語能力は、初級レベルや中級レベルとどう違うのか、またどのように教えるのかなどを、具体例を入れながら説明していきます。

..... 1

中級から上級へ

1-1 上級レベルとは

上級レベルというのは、具体的にどのような能力を指すのでしょうか。第 6 章でさまざまな基準についての説明をしましたが、その中の日本語能力試験の N1 レベルの能力の記述 (p. 93) には「幅広い場面で使われる日本語を理解することができる」と書かれています。さらに、このうち「読む」では、「幅広

第 8 章

技能別の教え方を 考えよう

この章を理解するための



キーワード

- ▶ 総合型クラス、技能別クラス
 - ▶ 漢字圏、非漢字圏、表記法
 - ▶ 読解、精読、速読、多読、スキミング、スキヤニング
 - ▶ 言語相互依存仮説、ワーキングメモリー、パラ言語、ノンバーバルコミュニケーション
-

第 4 章から第 7 章まで、学習レベル別に四技能を同時に学んでいく授業について述べてきました。この章では、四技能のいずれかに焦点を当てて学んでいくときの方法や注意点について学びます。

..... 1

四技能を並行して習得する重要性

一般的に言って初級の中頃までは、四技能を並行して学んでいくことが必要だと思います。というのは、四技能の習得レベルに著しい偏りがあると、初級の後半、あるいはその先のレベルに進むことが難しくなるからです。

地域のボランティア日本語教室などで、会話はとても上手なのに、ひらがなも読めない、という外国人に会うことがあります。多言語環境に育った人が多いような気がしますが、子どものころからさまざまな言語を聞いて育った人の中には、短い時間に自然に新しい言語が話せるようになる人がめずらしくない

第 9 章

テストの目的と 作り方を考えよう

この章を理解するための



キーワード

- ▶ テスト
 - ▶ プレースメントテスト、クイズ、ディクテーション
 - ▶ 小テスト、中間テスト、期末テスト
 - ▶ 妥当性、信頼性
-

学習者がどれだけの日本語力を持っているか、日本語コースでどれだけの日本語力をつけたかを測るために、最もよくおこなわれるのがテストです。

テストは、限られた時間内で、その時点での学習者の日本語力の、ある側面を測るものです。テストで学習者のすべての日本語力を包括的に測れるわけではありません。そのため、テストを実施する教師は、いつ、どのような目的で、どのような方法のテストを、どのようにおこなうか、得た結果をどのように使用するかを十分検討したうえで実施する必要があります。

..... 1

日本語コース内のテスト

日本語コースでは、クラス分けのためにおこなうプレースメントテストから始まり、授業内でのクイズ、教科書の課ごとにおこなう小テスト、学期の中頃におこなう中間テスト、学期の最後におこなう期末テストというように、初めから終わりまで、テストがつきものです。以下、それぞれのテストの特徴と、

第 10 章

評価の全体像を考えよう

この章を理解するための



キーワード

- ▶ 評価、アセスメント
- ▶ 到達度テスト、熟達度テスト
- ▶ 診断的評価、形成的評価、総括的評価
- ▶ 波及効果
- ▶ ポートフォリオ評価、Can-do 評価、ループリック評価

学習者の日本語力を測る方法は、テストだけではありません。この章では、テストも含む、学習者の日本語力を測定する方法の全体を視野に入れた、**評価**について説明します。

..... 1

評価とは

評価は、個人的な好き嫌いや、インターネット上でよく見られる、飲食店や映画などのおすすめ度、商品への点数つけなど、日常的な価値判断も含む広い概念です。関・平高編（2013）では、日本語教育における評価について、評価とテスト、その間に**アセスメント**という概念があることを、以下のような図で説明しています。この章ではまず、第9章で述べたテストの種類と効果を概観し、その後、日本語力をテストよりも自然な形で測りうるアセスメントの方法を、テスト以外の評価として紹介します。